

論 文 内 容 要 旨

Histopathological analysis of the association between mucosal epithelial changes and the lamina propria vascular network in irritation fibroma.

神奈川歯科大学大学院歯学研究科

環境病理学分野 天野理江

(指 導 : 槻木 恵一教授)

論文内容要旨

刺激性線維腫は口腔粘膜の局所的な外傷または慢性刺激によって引き起こされる線維性組織の限局性過形成であり、外的傷害因子に対して扁平上皮の萎縮あるいは肥厚がみられる。しかし、ほとんどの症例で潰瘍は形成されない。Weiらは、潰瘍の経時的モニタリングにより血管網の変化が潰瘍の発生と回復に密接に関与していると報告した一方で上皮下の血管網との関連性について推察されるが、その機序についての検討報告は未だにない。本研究では刺激性線維腫の粘膜上皮下の血管網について着目し、口腔粘膜組織において潰瘍を形成しないメカニズムについて病理組織学的に解明することを目的とした。

方法は、刺激性線維腫の指標マーカーとして有用なCD34とBcl-2を用いて鑑別したコラーゲン線維の増生が粘膜固有層に進展していない症例で、断端部を含む刺激性線維腫の頬粘膜、17症例を対象としCD31とKi-67に対する一次抗体を用いて酵素抗体法により免疫染色を行った。測定は、上皮の厚みについては、基底細胞層から有棘細胞層の厚みを測定し、Ki-67は、測定部位の基底層の陽性細胞の数と陰性細胞の数をカウントし計算した。CD31による血管の測定は、1切片断端部より3か所、病変直上部より3か所の浅層粘膜固有層（基底膜から0～100 μ m）と深層粘膜固有層（基底膜から10～100 μ m）の血管の個数、1血管当たりの面積を測定した。断端部をcontrol群とし、病変直上部との比較を行い統計解析した。

結果として、上皮の厚みは、断端部の厚み方が有意に高い値が観察された。Ki-67陽性細胞率も断端部の方が有意に高い値を示した。CD31血管数と血管面積は、断端部と病変直上部の浅層粘膜固有層間では、有意に断端部の方が多量の血管数と大きい血管面積を認め、断端部と病変直上部の深層粘膜固有層間では、有意差がみられなかった。断端部では、表層粘膜固有層と深層粘膜固有層の間では、有意に深層粘膜固有層の方が多量の血管数と大きい血管面積を認め、病変直上部でも表層粘膜固有層と深層粘膜固有層の間では、有意に深層粘膜固有層の方が多量の血管数と大きい血管面積を認めた。深層粘膜固有層での血管網は、維持されていることから、被覆上皮への栄養供給を補償しており、潰瘍形成されず粘膜下組織はコラーゲン線維の豊富な線維性組織の増生となり、過形成病変となっていることが示唆された。

しかし、この深層粘膜固有層での血管網の維持に貢献する物質は不明であり、今後分子生物学的なメカニズムの解明が必要であると考えられる。また、高齢者において粘膜固有層の血管は、数は変化しないが細くなる傾向が認められることも報告されていることから、今後、高齢者の刺激性線維腫において、潰瘍形成の発症機序について本研究と同様の条件での検討も必要であると考えられる。